

秋立つころ

つちだりうたらう
土田龍太郎

曆のうへにてこそ夏はや過ぎてすでに秋に入りぬれ、暑かはしきいつはてむとも知れずおしかへしつりのりゆく心地さへすれば耐へがたきことよなし。おほかた一年のうちに暑氣ことにはなはだしきは、仲夏にしもあらで立秋の後より處暑に至る間にほかならずと言へることげにこの日ごろにぞさこそと思ひ知られぬる。これ古き典に説けるごとく、陰氣なほ陽氣に障へられて内にこもりとみにも外にえ出でやらぬゆゑにてもやあるべからむ。あまつさへ大雨降りしきり荒き風さへ吹きつのでりて野分立つ日うち續きぬれば、老いせしわが身いとど弱りゆくままにうたて苦しきこといふはかりなし。

孟秋には涼風至り白露降り寒蟬鳴くと月令に記せれど、漢土の古へにてこそはさもありけめ、近き世のわが東の京のほとり、秋の初つかたとて、四方のけしきとみに變るべくもあらで、夏めける日ざしなほところがほなるぞいとくげなる。されば秋の訪れいつの年よりも待ち遠なるはさることなれども、ほのかにそれかと知らるるけはひだにいまだなきこそいとあぢきなけれ。おほよそ時の移ろひ目にはさやかに見えずその色としもなきものなれど、ことには秋の訪れあたかも盗人のひそかに忍び來るにさも似たるなるべし。

かかりけるほどに、暑さなほ冷めやらす、吹く風いまだ肌へに涼しからねども、なにとやらむ昨日にはかはりて身にしむ心地せらるるはわが思ひなしにてもやあらむ。おぼつかなきままにふとあたりを見やれば、わが庭に生へる荻の廣葉に風のさと渡りてそよげるにてぞありける。これぞげに待ちわびぬたりしまことの秋のけはひにほかならねばなつかしきことただならず。

秋立つきざしげにさまざまなれども、いとしもめでたきものとは、この荻の上風にまされるものまたありとも思はれず。さればこれにつきて古へ人の詠めりし歌いとあまたにて、ここに記し列ねむによしなし。今はただ拾遺集に載れる貫之朝臣の一首ばかり引かばこと足りなむ。

荻の葉のそよ音こそ秋風の

人に知らるるはじめなりけれ

秋の初めと秋のさなかとなきけ深きこといづれまされると問はむも、そは人の心々なれば、あながちに定めむもえうなかるべし。木の葉すでにうつろひて淺茅生の野にすたく蟲の音しげくなるままに四方の静かさどわびしさといとどつのでりて耐へがたきまになりゆけば、世の人の心にはかかる秋のさ中のあだし時にまさりてひたぶるにあはれなるは、げにことわりにもすぎたるべし。さはれ夏のけしきいまだ去りがてに残れるころ荻の葉上を渡る風にはつかなる秋の訪れのはかにそれと知らるるもおもしろきことたとへむにもなければ、秋の初めのをかしさそのさかりのあはれさに劣れりとはをさをさ思ふまじきにこそあめれ。

(令和元年九月十八日受附)

